金田一春彦先生を偲んで

早　田　輝　洋

長年に亘り日本言語学会の評議員を務めていらした金田一春彦博士は，平成16年（2004年）5月19日，甲府市内の病院で長逝された．享年91才であった．

一時，足腰を弱くなさっていて心配していたが，それもご恢復になったと聞きほっとしていた所に突然の訃報に接し，驚きを禁じ得なかった．

先生は金田一京助博士の長男として大正2年（1913年）東京市本郷に出生され，旧制浦和高校を経て，東京帝国大学国文科を卒業された．

こと日本語に関する限り古今東西・辞書・専門書・一般向け啓蒙書・随筆・音楽にも亘る多くの著書・論文を著しながら，京都産業大学教授，名古屋大学教授，東京外国語大学教授，上智大学教授，武蔵野女子大学教授等数々の大学で斯学の発展，後進の育成に努めていらした．

先生が講師として方言学を講じていらしたのを垣間見たことはあるものの，言語学科に所属して満洲語等アルタイ諸語に興味を持っていた私はついぞ先生の教えを直接受けることもなく，初期の頃は寧ろ国学院大学で講演された父君京助先生の印象の方が鮮明だったように思われる．春彦先生と親しくお話するようになったのは，私がNHK職員だった時にNHKの発音・アクセント辞典の編纂委員として，また放送用語委員として，しばしば先生にお越し頂いた頃であろう．当時の私は，電子計算機が自由に使えるようになるまでは満洲語は暫くお預けにしてアクセント研究でお茶を濁そうか，と思っていた時だったから，アクセント研究ということで先生と色々お話しするようになった．委員会の合間に，今度ジム・マコーレーたちと山梨県の奈良田に行くけれど，などと相談を持ちかけると，私のような若僧にも先生は例のにこやかなお顔でいろいろ教えて下さった．私のアクセント研究も段々お茶を濁すだけでは濟まなくなり，現代諸方言のアクセント・名義抄アクセント・朝鮮語諸方言のアクセントと手を広げて行くと，服部先

生と私と春彦先生との間で種々意見の違いが出たりして，生意気にも私が服部先生とやりあう，別の面で私が春彦先生とやりあう，時には服部先生の春彦先生批判が私に来る，春彦先生の服部先生批判が私の所に来るなどして，私が間に挟まれてしまったこともある．今となればそれも結構楽しい思い出である．

北京の日語培訓班，俗称大平学校，には短期間ながら先生ご夫妻ともご一緒して実に楽しい思いをした．北京語言学院でお正月に百人一首を取ったが，流石に先生は札の取り方も正確で早く，私などはとても歯が立たなかった．こんな所でも国文出と言語出の差が出てしまう，と思ったものだった．先生は日本語教育の経験も並のものではないし，多くの辞書を出した日本の有名な先生として中国の学生には大変な人気だった．

上にも書いたように，先生の論著は多岐に亘っているが，国語学者として真にご専門とする所は，ご自分でも表明されているとおり「日本語アクセントの史的研究」であった．現代諸方言の共時的研究も，先生としては史的研究のためのものであった．一言語の史的研究のためには，過去の言語を反映している文献資料の研究と同系諸方言の共時的研究との両方が必須である．多くの研究者がその片方に偏りがちなのに，先生はその両面の研究に努めていらしたのは――今でこそそういう研究者も多くなってきたとはいえ――それぞれの面の広さと深さの点で数少ない方に違いない，と思っている．

アクセントの史的研究の為の諸方言アクセントの共時的研究の大きな成果の一つが，「金田一の類」とも呼ばれている「類別語彙表」である――日本語アクセント研究の世界に多大の影響を与えていながら，しばしばその本質が誤解されて共時的な研究に用いられているが．「類別語彙表」は，日本祖語のアクセント体系におけるアクセント型の区別（類別）を，先生が比較言語学の手法で現代諸方言のアクセント型から再構（reconstruct）したものである．1937 年に二モーラ名詞を五類に分けたのを発表されて以来発展してきたもので，私の知る限り最新のものは『国語アクセントの史的研究―原理と方法―』(1974) に載せられたもの（62 頁以下）であるが，これには琉球諸方言の資料が再構の材料に入っていない．先生としては，琉球諸方言もこの再構の枠組（類別）から説明できる，とのお考えだったが，この点については後進の研究者が目下精力的に研究を進めて

おり，先生の類別語彙表を更に発展させたものが出来ると期待している．

文献によるアクセント研究では，多々ある有名な著作の中でも，今に伝わる譜本に反映した鎌倉時代のアクセントの研究である『四座講式の研究』(1964) が私にとっては最も為になり好きな著作である．これは服部四郎先生の研究を受継いで大成したものとのことであるが，立派な専門書であるとともに，入門書としても――やや難しいかも知れないものの――素晴しい．アクセント研究の入門書としては，さきに挙げた『国語アクセントの史的研究―原理と方法―』(1974) がそのつもりでお書きになったものと思われる．しかし，まるっきりの初学者でない限りは『四座講式の研究』こそよき入門書になる．文献，譜本，実際に今でも演奏されている旋律，前後の時代のアクセントの状態から，鎌倉時代のアクセント体系を再構する，またそのために必要な，文献そのものの精緻な研究などなど，私には読むだけでもこよなく楽しいものであった．アクセント研究より「四座講式」そのものの研究の方が大変だったとのことで，この研究は声明史の研究，邦楽学の研究でも大きな意義のあるものだそうである．音楽家になっていらしたかも知れない先生ならではのことであろう．邦楽研究家で自らも平家琵琶を演奏される等，私の知らない面でも活躍されていたという．

方言アクセントの研究でも，譜本も含めた文献によるアクセント研究でも，先生のアクセント研究の底に流れるアクセント観は独特のものであった．古今の日本語も，英語のアクセントでさえ，皆，現代北京語の四声のような音節（モーラ）単位の声調――例えば，東京アクセントは「高」「低」二声の体系，『類聚名義抄』などに反映している平安時代のアクセントは「高」「低」「昇」「降」の四声（或いはこれに「昇降」を加えた五声）の体系――と考えていらした所など，服部四郎先生など（私も含めて）と大きく考え方が違い，議論はかみ合わないままであった．それはアクセント観の違いというよりは，言語構造に対する考え方の違いによるものであった．音形，音形を反映している文字（声点など）から，その背後にどのような言語を考えるか，どのような言語体系（アクセント体系）が有りうると考えるのか，時間を考慮に入れて，あり得たと考えるのか，という点の違いについては突き詰めた議論の機会もないままになってしまった．

あまり深入りした議論には向かなかったようであるが――というより先生と向

い合っていると，そんな議論をするより他のお喋りをしている方が楽しかったというのが正直の所だったが――終始にこやかで，話し上手・書き上手，つねに聞き手・読み手を魅了していたタレント性豊かな先生でいらした．

NHK 放送文化賞・文化功労賞をお受けになったのは存じているが，まだ私の知らない賞も数々お受けになっていらっしゃるに違いない．国語学会代表理事も務められ，東京都名誉都民に顕彰されている．1996 年には山梨県大泉村に「金田一春彦ことばの資料館」が開館した．計画では十巻余りに及ぶという先生の著作集は，今ようやくその半ば近くまで刊行された所である．もう先生とお話しする機会もなくなってしまった．心からご冥福をお祈りする次第である．